第一回

大島輝久の會

令和三年 八月一日

十四世喜多六平太記念能楽堂

ご挨拶

本日は第一回大島輝久の會にご来場賜り、まことにありがとうございます。

18歳で地元の福山から上京し早や27年もの歳月が経ちました。

「東京で10年ほど修行すれば少しは祖父や父の手伝いが出来るようになるのだろうか」という漠然とした気持ちしか持っていなかった上京当時は、将来自分が東京で演能会を催す事など想像も出来ませんでした。

しかし修行を重ねる中でこれまで積み重ねてきた事を自分自身が確認し、それを世に問う場を持たなければならないという危機感にも似た気持ちが次第に強くなり、この會の発足を決意致しました。

また本日の番組には追悼の想いを込めております。

私を能の世界に導いてくれた祖父・大島久見の十七回忌に当たるのが昨年でした。

追善の催しを計画をしておりましたが、思わぬコロナ禍の影響で何一つ行う事が出来ませんでした。祖父は節目を大切にしてきた人でしたから、泉下でさぞ怒っているのではないかと思います。一年遅れとなりましたが本日の舞台を祖父に手向けたいと思います。

未だコロナ禍の影響が色濃く残る中で、舞台を催す事に果たしてどんな意味があるのか、という事をずっと考えさせられ続けて参りましたが、我々舞台人は舞台に立つことでしか自己の存在意義を見出すことが出来ません。

このような時期に開催するわがままをどうかお許しください。

本日御出演頂く諸先生方、ご来場賜りました皆様に重ねて御礼を申し上げます。

大島輝久

大島久見 追悼
大島輝久の會 番組

仕舞 **源氏供養** 大島 衣恵

地謡 塩津 圭介
狩野 了一
大島 政允
大島 輝久

舞囃子 **清経** 友枝 昭世

大鼓 亀井 忠雄
小鼓 飯田 清一
笛 杉 信太朗

地謡 佐藤 陽
粟谷 充雄
粟谷 浩之
長島 茂
香川 靖嗣
大村 定

狂言 **悪太郎**

シテ・悪太郎 野村 萬斎
アド・伯父 石田 幸雄
小アド・僧 野村 万作
後見 野村 裕基

休憩（二十分）

仕舞 **藤戸** 塩津 哲生
誓願寺 大島 政允
融 香川 靖嗣

地謡 佐藤 陽
金子敬一郎
大村 定
内田 成信

能 **望月**

ツレ・安田友春の妻 佐々木多門
子方・花若 大島 伊織
シテ・小沢友房 大島 輝久
ワキ・望月秋長 宝生 欣哉
間・望月の従者 野村太一郎

大鼓 亀井 広忠
小鼓 飯田 清一
太鼓 林 雄一郎
笛 杉 信太朗

後見 塩津 哲生
中村 邦生
友枝 雄人

地謡 塩津 圭介
内田 成信
金子敬一郎
友枝 真也
狩野 了一
粟谷 明生
出雲 康雅
長島 茂

終了予定 午後五時半頃

解説

山中 玲子
法政大学能楽研究所所長・教授

・狂言 悪太郎（あくたろう）

主人公は悪太郎という名ですが、この「悪」は「悪辣」とか「凶悪」を意味してはいません。「悪七兵衛景清」の「悪」と同じで、すごく強いヤツといったイメージです。

さてその乱暴で傍若無人の悪太郎、伯父が自分の大酒を陰で非難すると聞いて腹を立て、伯父の家に押しかけますが、そこで酒を振る舞われると好き放題に飲んだあげく、ひどく酔って帰りの道ばたで寝込んでしまいます。心配してあとを追ってきた伯父は、それを見つけ、武器を取り上げ悪太郎を出家の姿に変え、「おまえの名は南無阿弥陀仏だ」と声をかけて立ち去ります。目を覚まし自分の姿に気付いた悪太郎は、夢うつつで聞いていた伯父の言葉を仏のお告げかと思うのですが、そこへ出家僧が「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えながらやって来て…。

中世の説話には、悪人が一度発心すると誰よりも激しく仏道を求めるという話が多くあります。常識的なバランス感覚や世間知による計算などから外れているほど、反転したときのエネルギーも大きくなるということなのでしょう。狂言の理解にそのような面倒なことを考える必要はないでしょうが、悪太郎、やっぱりそんなに悪い奴ではないようです。

・能 望月（もちづき）

本曲は、敵討ちをテーマにした能の一つです。シテの小沢刑部友房によって、彼の主君であった信濃国の安田友春がいとこの望月秋長と口論の末に殺されてしまったことや、友房自身も命を狙われ本国に帰ることもできず、近江守山の宿に身を潜め兜屋という宿屋の主人になっていることなど、本曲の舞台設定が示されます。殺傷事件からどのくらいの時間が経っているのかは明言されていませんが、守山の宿での兜屋の評判は良いようですから、それなりの月日は過ぎているのでしょう。

ある日、旧主である友春の妻（ツレ）と遺児の花若（子方）が、信濃から逃れ放浪の果てに守山宿に辿りつき、偶然兜屋に宿を取ります。三人は涙ながらに再会を喜ぶのですが、なんとそこに、敵の望月（ワキ）までが現れ、やはり兜屋に泊ることになったことから、物語は動き出します。望月は殺傷事件のせいで一度は取り上げられていた領地を返してもらい、晴れて故郷へ帰る旅の途中です。用心して名を隠し従者（アイ）に宿を探させますが、アイはうっかり望月の名前を口にしてしまいます。数ある宿屋の中から兜屋を選んだのも、そこで望月の正体を漏らしたのも従者の行為。現在能に登場するアイはこうしてストーリーをぐんぐん進めていく役を担うことがよくあります。

この奇跡的な好機を活かそうとシテ友房は敵討ちのプランを練ります。望月のために酒宴を開き、ツレは盲目の女芸能者（盲御前）、子方はその手を引く役として望月に近づいて、望月が酔い潰れたところを討とうというのです。中世には鼓を膝に載せて打ちながら語り物を聞かせる女芸能者がいたことが絵画資料などからも判っています。能《安宅》で旅をする義経一行が山伏に変装するのと同様、盲御前の変装は、母子を酒宴の場の望月に近づけるのにふさわしい工夫と言えるでしょう。

盲御前に扮したツレは、曽我兄弟の敵討の話を語ります。アイは「差し障りがある」と留めますが、本領安堵で気が大きくなっている望月が、器の大きなところを見せて許したのです。その謡の中の「敵を討たせ給へや」という文言に反応して幼い花若が興奮し「いざ討とう」と叫んでしまい、びっくりした望月も刀に手をかけ一触即発。そこでシテが「うとう」とは八撥（羯鼓）を打とうという意味だと取りなして場を収めますが、シテのそのような発言のせいで、誇り高い武士の子供が羯鼓を打つことになってしまうのです。瞽女に付き添う子供なら羯鼓を打って見せてもおかしくない（だからこそシテはそのように取りなした）のですが、花若にはたいそう屈辱的なことだったのでしょう。そこで花若も仕返しに「亭主は獅子舞を舞う」と言い、シテも獅子を舞うことになる、という形で、芸尽くしの要素が巧みにストーリーの中に組み込まれています。謡曲本文を見る限り、当初のプランには鞨鼓も獅子舞も入っていません（他流では最初から鞨鼓や獅子舞について相談する形もありますが、それは後代の変更です）。望月を酒に酔わせて殺せば良かったのであって、盲瞽女への変装も同席するための策だったはずです。それが、花若の未熟さゆえの失敗とそれを取り繕おうとした友房の機転から予想外の方向へ。思わぬ一言からドミノ倒しのように展開していく筋書き上のスリルと面白尽くの芸能を、我々観客も楽しめることになったわけです。

そしてこの〈獅子〉の舞が、本曲を特徴付けるもう一つの大きな特徴でもあります。本来大和猿楽とは別系統の芸だったらしい〈獅子〉の舞は、本曲のほか《石橋》でも舞われますが、どちらも江戸時代の初めには上演が途絶え、その実態も判らなくなっていました。激しい動きが難しく失敗して恥をかくことも多かったでしょう。秘事にし過ぎたせいもあって伝承が途絶えてしまっていたのです。『御世話筋秘曲』（能楽史料第一編。わんや書店）によれば、家康が《石橋》の〈獅子〉を見たいと希望したとき、四座には伝承が途絶えており、喜多七大夫だけが覚えていたということです。復曲を試みましたが、実現する前に家康自身が他界してしまいました。次の将軍秀忠の代になり、この時は《石橋》ではなく《望月》でということになり、「七太夫初て獅子を舞ひし」とあります。喜多流では他流と比較しても〈獅子〉を非常に重く扱います。若い役者が一人前になる証しとして《道成寺》を舞うことは有名ですが、他流では〈乱〉や〈獅子〉を経験した後に《道成寺》という順なのに対して、喜多流では《道成寺》を披いた後に、《石橋》のツレ赤獅子として〈獅子〉を舞う習慣になっています。これも、〈獅子〉復元に直接関わった流儀の歴史によるものかもしれません。

ただし本曲の〈獅子〉は、扇を二枚重ねて獅子の口のように見せ、覆面を着けた、雑芸としての「獅子舞」の物まねです。霊獣獅子の激しい動きを見せることが主目的の《石橋》とは違い、他にもたくさんやることがあるのです。旧主の家族と巡り会った喜び、奇跡のようなチャンスを活かすための計略、危機に際しての機転、そして敵討ちと、現在能としてのストーリーを運びながら、獅子舞までも舞ってみせるという八面六臂の活躍。脂ののった大人の役者、大島輝久さんの魅力をたっぷり楽しみたいと思います。

私の内なる能のはじまり

杉本 博司
現代美術作家

私は本末転倒の人生を歩んできた。私はこの国を22才で出るまで一度も能を見たことがなかった。それまで私は唐十郎や寺山修司の実験演劇を見ていて、古典演劇には一顧だにしなかったのだ。国を出てカリフォルニアに住み始めてみると、当時はカウンターカルチャーのまっさかりで若者たちは東洋神秘主義に憧れていた。私は禅について尋ねられ、悟っているかと問われうろたえた。私は日本人でありながら日本のことについてほとんど無知であることに気付いたのだ。これはまずい、私は海外にあって日本人として日本に関しての説明責任があると強く感じた。とりあえずみんなが読んでいる鈴木大拙の「禅と日本文化」を読んでみた。この本は英語で書かれている。禅に入門するには門前で三日も待たねばならないと思っていた私は、この書が明快な論理で禅とは何か、そして日本文化の特質が語られていることに驚いたのだ。

私は付け焼刃で日本文化の基礎資料を読み込んでいった。幸いなことにロスアンゼルスにはリトルトウキョウと呼ばれる日本人町があった。驚くべきことにそこは大正時代だった。日本人移民が移住してきた当時の姿が色濃く残されていたのだ。久しぶり美容院の近くに本屋という本屋があった。文庫本はすべて1ドル、背表紙は濃い茶色に変色していて奥付を見ると戦前のものも多い。私は岡倉天心の「茶の本」や小泉八雲の「怪談」をはじめとして片っ端から乱読した。丁度その頃、三島由紀夫の割腹が報じられ、私の精神的日本回帰への関心はいや増していった。乱読の中に岩波古典文学全集「能」二冊組があったのが、私の能楽との出会いだった。夢幻能という演劇形式に私は驚いた、時間軸が崩壊して過去と今が曖昧模糊だ、今生きている人の生と死者の生が交歓する、なんということだ。

私が能を実見できたのは久しぶりに帰国した1977年だった。水道橋能楽堂での「屋島」だった。その頃はのどかでお婆さん達が弁当を広げて観能していたのが印象に残った。私は日本人なのに外国人が初めて能を見るように能を見た。その時の印象が熾火のように心に沁みたのだろうか。次の能との邂逅は24年後の2001年まで待たねばならなかった。またもや本末転倒が起こった。私は長谷川等伯の「松林図」への嫉妬から、写真でその表現を本歌取りしたいと思ったのだ。そして皇居前の松原を換骨奪胎して私の「松林図」が完成し、オーストリアのブレーゲンツ美術館でのお披露目がきまったのだ。その時、魔が差した。松の絵には能舞台がなければならないという声が聞こえたのだ。私は美術館内に能舞台を設計し、スイスの材木会社が気前よく舞台を寄付してくれた。せっかく舞台を作るのだから能を見せてくれと言われて私は戸惑った。急遽海外遠征隊が組まれ、狂言方の善竹十郎氏が実質的な団長となってスイスとニューヨークでの公演が決まったのだ。

2018年 4月11日　江之浦測候所石舞台「石橋於石橋」
企画/構成・杉本博司　白獅子・塩津哲生 赤獅子・大島輝久

演目は縁のある「屋島」にした。これは修羅能でも勝修羅と言われる。勝者である義経の霊が浮かばれず冥界を彷徨う。そしてニューヨークに一行が着いてみると、そこはまさに修羅場だった。9・11から一箇月後、ブロードウェイも含め歌舞音曲一切自粛の風潮の中で、迷いに迷った末、私は公演をすることを決意した。修羅の場では勝者も敗者も共に成仏できず迷い続けるという、この曲のテーマが、報復を声高に叫ぶ当時のアメリカに向けての、何らかのメッセージになるのではと思ったからだ。

次の因縁は間髪を置かずに襲ってきた。翌年の2002年、私が取り組んできた直島の護王神社が完成したのだ。直島からは瀬戸内海を挟んで古戦場・屋島が目の前に見晴らせる。私は護王神社完成記念奉納能として、神前に特設舞台を作り、能「屋島」を献納することにした。現場能というのだろうか、果たして夕闇が迫り、後シテの義経の霊が登場する段になると、一天にわかにかき曇り一陣の風が吹き渡ったのだ。戯曲は戯れではない、とその時私は悟った。

2012年、私は新作能を書き始めた。満洲国建国の立役者、板垣征四郎大将が、巣鴨の獄中で書いた長文の漢詩「自序」が私の心を打ったのだ。東京裁判での死刑判決を前にして、自身の一生を振り返る漢詩だ。満洲国は王道楽土、五族協和を掲げた理想国家の筈だった。ところが己の意に反して事態は進んで行き、敗戦に至る。私は平家滅亡の物語が、盲目の琵琶法師によって語り継がれ、百年ほどたって平曲となり、能として完成していった経緯を思い出した。先の大戦もそろそろ語り物として伝えていかなければと私は強く思ったのだ。この板垣征四郎の漢詩は能の謡いとして翻案できる、私は能「巣鴨塚」の構想を膨らませていった。登場人物は東条大臣（東條英樹）、石原の少将（石原莞爾）、慄屯卿（リットン卿）、松嵩の中将（マッカーサー）、帝（昭和天皇）。シテは板垣征四郎常信とした。

冒頭の地謡は次のように始まる。「枯れ野に春は遠からじ、枯れ野に春は遠からじ、巡り廻るは因果の春。――げに恐ろしや春の便り、寂滅亡国の響きあり。国滅びて山河あり、春の訪れ恐ろしや。」春の便りは開戦のきっかけとなったハルノートを意味する。

この新作能「巣鴨塚」は今、大島輝久氏の助力を得て、一歩一歩完成への道のりを歩んでいる。

杉本 博司　1948年 東京生まれ。
活動分野は写真、彫刻、インスタレーション、演劇、建築、造園、執筆、料理と多岐に渡り、世界のアートシーンでその地位を確立。伝統芸能に対する造詣も深い。
2009年 高松宮殿下記念世界文化賞（絵画部門）受賞。
2013年 フランス芸術文化勲章オフィシエ叙勲。
2017年 文化功労者。

大島輝久の會

https://www.noh-oshima.com/
osimano@orange.ocn.ne.jp

主催
有限会社 樫木端

撮影 中村 治　　装丁/デザイン 堀 貴之　　題字 村宮 ゆみこ

演能記録　大島家の望月

- **故羽田惣右衛門先生 50回忌**
  1925年（大正14年）5月15日
  演能会場：大島能舞台（福山）
  シテ　大島 壽太郎（54才）　子方　大島 久見（11才）

- **十四世喜多六平太先生文化勲章受章祝賀**
  1954年（昭和29年）4月11日
  演能会場：葦陽高等学校講堂（福山）
  シテ　大島 久見（39才）　子方　大島 政允（12才）

- **大島定期公演 124回**
  1986年（昭和61年）11月16日
  演能会場：喜多流大島能舞台（福山）
  シテ　大島 政允（44才）　子方　大島 輝久（10才）

- **第1回 大島輝久の會**
  2021年（令和3年）8月1日
  演能会場：十四世喜多六平太記念能楽堂（東京）
  シテ　大島 輝久（45才）　子方　大島 伊織（12才）

シテ　大島 久見　子方　大島 政允

シテ　大島 政允　子方　大島 輝久